

# オツベルと象

宮沢賢治

青空文庫



……ある牛飼うしかいがものがたる

## 第一日曜

オツベルときたら大したもんだ。稲扱いねこぎ器械の六台も据すえつけ  
て、のんのんのんのんと、大そろしない音をたててやっ  
ている。

十六人の百ひやくしやう姓せいどもが、顔をまるつきりまつ赤にして足で踏ふ  
んで器械をまわし、小山のように積まれた稲を片つぱしから扱こい  
て行く。藁わらはどんどんうしろの方へ投げられて、また新しい山

になる。そこらは、もみ 粃や藁から発たつたこまかな塵ちりで、変にぼうつと黄いろになり、まるで沙漠さばくのけむりのようだ。

そのうすくらしい仕事場を、オツベルは、大きな琥珀こはくのパイプをくわえ、吹ふき殻がらを藁わらに落さないよう、眼めを細くして気をつけながら、両手を背中に組みあわせて、ぶらぶら往いつたり来たりする。

小屋はずいぶん頑がん丈じょうで、学校ぐらいもあるのだが、何せ新式稲扱器械が、六台もそろってまわってるから、のんのんのんふるうのだ。中にはいるとそのため、すっかり腹すが空くほどだ。そしてじっさいオツベルは、そいつで上手に腹をへらし、ひるめしどきには、六寸ぐらいのビフテキだの、雑ぞう巾きんほどあるオムレツの、ほくほくしたのをたべるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんやつていた。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやって来た。白い象だぜ、ペンキを塗ぬったのでないぜ。どういいうわけで来たかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋の入口に、ゆつくり顔を出したとき、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合つては大へんだから、どいつもみな、いっしょうけんめい、じぶんの稲を扱あっていた。

ところがそのときオツベルは、ならんだ器械のうしろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭すどく象を見た。それからす

ばやく下を向き、何でもないといいふうで、いままでどおり往つたり来たりしていたもんだ。

するとこんどは白象が、片<sup>かた</sup>脚<sup>あし</sup>床<sup>ゆか</sup>にあげたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕事<sup>いそが</sup>が忙しいし、かかり合つてはひどいから、そつちを見ずに、やっぱり稲を扱っていた。

オツベルは奥<sup>おく</sup>のうすくらいところで両手をポケットから出して、も一度ちらつと象を見た。それからいかにも退<sup>たい</sup>屈<sup>くつ</sup>そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭のうしろに組んで、行つたり来たりやつていた。ところが象が威勢<sup>いせい</sup>よく、前<sup>まえ</sup>肢<sup>あし</sup>二つつきだして、小屋にあがつて来ようとする。百姓どもはぎくつとし、オツベルもすこしぎよつとして、大きな琥珀のパイプから、ふつとけむり

をはきだした。それでもやっぱりしらないふうで、ゆつくりそこらがあるいていた。

そしたらとうとう、象がこのこ上つて来た。そして器械の前のところを、呑気のんきにあるきはじめたのだ。

ところが何せ、器械はひどく廻まわっていて、粉もみは夕立あられか霰あられのように、パチパチ象にあたるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその眼を細めていたが、またよく見ると、たしかに少しわらっていた。

オツベルはやつと覚悟かくごをきめて、稲いね扱こぎ器械の前に出て、象に話をしようとしたが、そのとき象が、とてもきれいな、鶯うぐいすみたくないいい声で、こんな文句を云いったのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂がわたしの歯にあたる。」  
まったく糲は、パチパチパチパチ歯にあたり、またまつ白な頭  
や首にぶつつかる。

さあ、オツベルは命懸けだ。いのちが  
パイプを右手にもち直し、度胸  
を据えて斯う云った。

「どうだい、此処は面白いかい。」  
おもしろ

「面白いねえ。」象がからだを斜めに<sup>なな</sup>にして、眼を細くして返事し  
た。

「ずうつとこつちに居たらどうだい。」

百姓どもははつとして、息を殺して象を見た。オツベルは云つ  
てしまつてから、にわかにながたがた顫え出す。ところが象はけろ



りとして

「居てもいいよ。」と答えたもんだ。

「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をくしやくしやにして、まっ赤になって悦よろこびながらそう云った。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、はたらかせるか、サーカス団に売りとばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。

## 第二日曜

オツベルときたら大したもんだ。それにこの前稲扱小屋で、うまく自分のものにした、象もじつさい大したもんだ。力も二十馬力もある。第一みかけがまっ白で、牙きばはぜんたいきれいな象牙ぞうげでできている。皮も全体、立派で丈じょうぶ夫ぶな象皮なのだ。そしてずいぶんはたらくもんだ。けれどもそんなに稼かせぐのも、やっぱり主人が偉えらいのだ。

「おい、お前は時計は要いらないか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめて斯きう訊きいた。

「ぼくは時計は要いらないよ。」象がわらって返事した。

「まあ持つて見ろ、いいもんだ。」斯きう言いながらオツベルは、

ブリキでこさえた大きな時計を、象の首からぶらさげた。

「なかなかいいね。」象も云う。

「鎖くさりもなくちやだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前肢にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三あし歩いて象がいう。

「靴くつをはいたらどうだろう。」

「ぼくは靴などはかないよ。」

「まあはいてみる、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張子の大きな靴を、象のうしろのかかとはめた。

「なかなかいいね。」象も云う。

「靴かぎに飾りをつけなくちや。」オツベルはもう大急ぎで、四百キ

口ある分銅を靴の上から、穿<sup>は</sup>め込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二あし歩いてみて、さもうれしそうにそう云った。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とはやぶけ、象は鎖と分銅だけで、大よろこびであるいて居<sup>お</sup>った。

「済まないが税金も高いから、今日はすこうし、川から水を汲<sup>く</sup>んでくれ。」オツベルは両手をうしろで組んで、顔をしかめて象に云う。

「ああ、ぼく水を汲んで来よう。もう何ばいでも汲んでやるよ。」象は眼を細くしてよろこんで、そのひるすぎに五十だけ、川から水を汲んで来た。そして菜っ葉の畑にかけた。

夕方象は小屋に居て、十把ばの藁わらをたべながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼かせぐのは愉快ゆかいだねえ、さっぱりするねえ」と云っていた。  
「済まないが税金がまたあがる。今日は少うし森から、たきぎを運んでくれ」オツベルは房ふかのついた赤い帽子ぼうしをかぶり、両手をかくしにつつ込んで、次の日象にそう言った。

「ああ、ぼくたきぎを持って来よう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大すきなんだ」象はわらってこう言った。

オツベルは少しぎよつとして、パイプを手からあぶなく落としそうにしたがもうあるときは、象がいかにも愉快なふうで、ゆつくりあるきだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さな咳せき

を一つして、百姓どもの仕事の方を見に行つた。

そのひるすぎの半日に、象は九百把たきぎを運び、眼を細くしてよろこんだ。

晩方象は小屋に居て、八把の藁をたべながら、西の四日の月を見て

「ああ、せいせいした。サンタマリア」と斯<sup>こ</sup>うひとりごとしたそうだ。

その次の日だ、

「済まないが、税金が五倍になった、今日は少<sup>か</sup>うし鍛冶場<sup>じば</sup>へ行つて、炭火を吹<sup>ふ</sup>いてくれないか」

「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、ぼく、もう、息で、石

もなげとばせるよ」

オツベルはまたどきつとしたが、気を落ち付けてわらっていた。象はそのそ鍛冶場へ行って、べたんと肢を折って座り、ふいごの代りに半日炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把わの藁をたべながら、空の五日の月を見て

「ああ、つかれたな、うれしいな、サンタマリア」と斯う言つた。どうだ、そうして次の日から、象は朝からかせぐのだ。藁も昨日はただ五把だ。よくまあ、五把の藁などで、あんな力がでるもんだ。

じっさい象はけいぎいだよ。それというのもオツベルが、頭が

よくてえらいためだ。オツベルときたら大したもんさ。

## 第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、おれも云おうとしてたんだが、居なくなつたよ。

まあ落ちついてききたまえ。前にはなしたあの象を、オツベルはすこしひどくし過ぎた。しかたがだんだんひどくなつたから、象がなかなか笑わなくなつた。時には赤い竜りゆうの眼をして、じつとこんなにオツベルを見おろすようになってきた。

ある晩象は象小屋で、三把の藁をたべながら、十日の月を仰あおぎ



見て、

「苦しいです。サンタマリア。」と云つたということだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、藁もたべずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」と斯う言つた。

「おや、何だつて？ さよならだ？」月が俄かに象に訊く。

「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意気地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月がわらつて斯う云つた。

「お筆も紙もありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しく

しくしく泣き出した。

「そら、これでしよう。」すぐ眼の前で、可愛い子どもかあいの声が出た。象が頭を上げて見ると、赤衣着物の童子が立って、硯すずりと紙を捧ささげていた。象は早速手紙を書いた。

「ぼくはずいぶん眼にあっている。みんなが出て来て助けてくれ。」

童子はすぐに手紙をもって、林の方へあるいて行った。

赤衣せきいの童子が、そうして山に着いたのは、ちょうどひるめしごろだった。このとき山の象どもは、沙羅樹さらじゆの下さのくらがりで、碁ごなどをやっていたのだが、額をあつめてこれを見た。

「ぼくはずいぶん眼にあっている。みんなが出てきて助けてくれ

」。

象は一せいに立ちあがり、まつ黒になって吠えだした。

「オツベルをやつつけよう」議長の象が高く叫ぶと、

「おう、でかけよう。グララアガア、グララアガア。」みんながいちどに呼応する。

さあ、もうみんな、嵐あらしのように林の中をなきぬけて、グララアガア、グララアガア、野原の方へとんで行く。どいつもみんなきちがいだ。小さな木などは根こぎになり、藪やぶや何かもめちやめちやだ。グワア　グワア　グワア　グワア、花火みたいに野原の中へ飛び出した。それから、何の、走って、走って、とうとう向うの青くかすんだ野原のはてに、オツベルの邸やしきの黄いろな屋根を見

附<sup>つ</sup>けると、象はいちどに噴<sup>ふん</sup>火<sup>か</sup>した。

グララアガア、グララアガア。その時はちようど一時半、オツベルは皮の寝<sup>しん</sup>台<sup>だい</sup>の上でひるねのさかりで、鳥<sup>から</sup>の夢<sup>す</sup>を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向うを見た。林のような象だろう。汽車より早くやつてくる。さあ、まるつきり、血の気も失せてかけ込<sup>こ</sup>んで、

「旦<sup>だんな</sup>那あ、象です。押し寄せやした。旦<sup>だんな</sup>那あ、象です。」と声をかぎり<sup>に</sup>叫んだもんだ。

ところがオツベルはやつぱりえらい。眼をぱちりとあいたときは、もう何もかもわかつていた。

「おい、象のやつは小屋にいるのか。居る？ 居る？ 居るのか。よし、戸をしめろ。戸をしめるんだよ。早く象小屋の戸をしめるんだ。ようし、早く丸太を持って来い。とじこめちまえ、畜ちくしよ生うめじたばたしやがるな、丸太をそこへしぱりつけろ。何ができきるもんか。わぎと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五六本持つて来い。さあ、大丈夫だ。大丈夫だとも。あわてるなつたら。おい、みんな、こんどは門だ。門をしめろ。かんぬきをかえ。つぱり。つぱり。そうだ。おい、みんな心配するなつたら。しつかりしろよ。」オツベルはもう支度したくができて、ラツパみたいないい声で、百姓どもを上げました。ところがどうして、百姓どもは気が氣じやない。こんな主人に巻き添ぞいなんぞ食いたくないか

ら、みんなタオルやはんけちや、よごれたような白いようなものを、ぐるぐる腕うでに巻きつける。降参をするしるしなのだ。

オツベルはいよいよやつきとなつて、そこらあたりをかけまわる。オツベルの犬も気が立って、火のつくように吠えほながら、やしきの中をはせまわる。

間もなく地面はぐらぐらとゆられ、そこらはばしやばしやくらくなり、象はやしきをとりまいた。グララアガア、グララアガア、その恐ろおそしいさわぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」やさしい声もきこえてくる。

「ありがとう。よく来てくれて、ほんとに僕ぼくはうれしいよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、まわりの象は、一そう

ひどく、グララアガア、グララアガア、堀へのまわりをぐるぐる走っているらしく、度々中から、怒おこってふりまわす鼻も見える。けれども堀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象もこわせない。堀の中にはオツベルが、たった一人で叫んでいる。百姓どもは眼もくらみ、そこらをうろうろするだけだ。そのうち外の象どもは、仲間の中からだを台にして、いよいよ堀を越こしかか  
る。だんだんにゆうと顔を出す。その皺しわくちやで灰いろの、大きな顔を見あげたとき、オツベルの犬は気絶した。さあ、オツベルは射うちだした。六連発のピストルさ。ドーン、グララアガア、ド  
ーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ところが弾丸たまは通  
らない。牙きばにあたればはねかえる。一疋ひきなぞは斯こう言った。

「なかなかこいつはうるさいねえ。ぱちぱち顔へあたるんだ。」

オツベルはいつかどこかで、こんな文句をきいたようだと思いつながら、ケースを帯からつめかえた。そのうち、象の片脚が、塀からこつちへはみ出した。それからも一つはみ出した。五匹の象が一ぺんに、塀からどつと落ちて来た。オツベルはケースを握つたまま、もうくしゃくしゃに潰つぶれていた。早くも門があいていて、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ込む。

「牢ろうはどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マツチのようにへし折られ、あの白象は大へん瘠やせて小屋を出た。

「まあ、よかったねやせたねえ。」みんなはしずかにそばにより、鎖と銅をはずしてやった。



「ああ、ありがとう。ほんとにぼくは助かったよ。」白象はさびしくわらってそう云った。

おや「一字不明」、川へはいっちやいけないいたら。



# 青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十三巻」筑摩書房

1980（昭和55）年3月

※「〔一字不明〕」は、底本編集時の注記です。

入力・・・r.sawai

校正：篠宮康彰

1999年2月6日公開

2011年2月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# オツベルと象

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>